

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 蔡 麟
論文題目 汀江流域の地域文化に関する研究
論文指導委員 松永 正義教授（正）、江夏 由樹教授（副）
学位取得年月日 2001年3月28日

本論文は、客家文化の地域性を捉えなおすことによって中国(漢族)文化の多元多様の実態を解明することを目的とし、客家侘攪仇の一部である汀江流域の地域文化の特徴と生成過程を実証的考察に基づき明らかにしようとするものである。また、先学の研究成果より多大な示唆を受けた本論文は、先学の研究成果が示した到達点から始まった研究作業である。

この研究では、汀江流域の地域文化の特徴と生成過程という二つの視角から考察を行ない、それぞれ上篇の三章と下篇の三章にまとめた。上篇においては、汀江流域地域文化の特徴の解明を、その担い手(地域文化集団)の独自性と内部多様性、当該地域の地理的環境と住民の生業形態の特徴を明らかにすることで試みた。下篇においては、当該地域の固有文化の特徴を考察した上で、この固有文化の変容過程＝同地域文化の生成過程について、諸エスニック・グループの文化的同一化、漢化と科挙とのつながり、地域共通語の形成と宋代鉱業とのつながり、という二点に焦点をしばって検討した。各章の主な論点は次の通りである。

(1)第一章「汀江流域の地域文化と客家文化」においては、汀江流域地域文化の主体集団の特徴を、その母語を切り口として考察した。

同地域住民のほとんどは、母語に言語学的分類で客家語とされる方言を用いる、いわば客家人である。これによって、汀江流域の地域文化は客家文化であると言える。

しかし、言語学的分類上で「客家語」とされる方言の主体集団は、1980年代「客家ブーム」以前より客家アイデンティティを持っていたかどうかによって二つに分かれる。そしてその客家アイデンティティを持っていなかった者は、さらに以下のように三つに分けることができる。すなわち(a)客家意識があまりなかった者。寧化、清流、連城、長汀の北部の住民はこの類に属する。(b)「客家」との区別から自己意識を持つ者。言語学的分類上で広東客家話に属する「水源音」と「河源音」の主体集団はこの類に属する。(c)「客家」との対立によってアイデンティティを持つ者。言語学的分類上で袴南客家語とされる方言の主体集団、いわゆる「袴南本地人」はこの類の代表である。同様に、1980年代「客家ブーム」以前から客家アイデンティティを持っていた汀江流域の客家にも内部的差異がある。それは主に以下の二点に示されている。一つは、方言が村によって異なり、幾つか隣接する村の方言はかなり多くの独自の語彙を持つことによって周囲の方言に区別する一つの「方言片」となることである。もう一つは、民族的所属上で漢族と邊族に分かれることである。このようなことは、一つの側面から汀江流域の客家文化が

他地域の客家文化に対する独自性と内部的多様性を持つことを示している。

こうした独自性と多様性からすれば、猪粵袴三省の境界地域の方言を「客家語」の概念で統括するという言語学的分類方法と、その地域の住民を一つの共同体＝「客家」としてとらえるという従来の客家論を再考する余地がある。

また汀江流域客家方言区における「武平軍話方言島」の形成と存在には、汀江流域の地域文化集団＝客家が明代にまだ王朝に「蛮」として扱われたことが見られる。

(2)第二章「汀江流域の地域文化と山地文化」においては、汀江流域の地理的位置、交通状況と資源状況を史的に考察した。

地理的位置と交通状況から見れば、この地域は山と丘陵の延べ面積が80%に近い典型的山間地区であるが、潮州、嫩州、福州といった中国史上における国際港に通じる交通路があった。韓江の上流である汀江は多数の支流を持ち、域内の各地を結びながら、その本流が全域の南北を貫き、山間地区の汀江流域を潮汕沿海平原、さらに海洋とつながる。この山と海の連結は南宋に「官塩」の運輸道とする「汀江－韓江航道」が開通されたことによって一層緊密となった。明代以降、潮州、汕頭における民間の国際貿易が繁栄を極め、長江流域の経済も唐宋時期より一層の発展を遂げた。この背景のもとで、「汀江航道－汀州瑞金通路」は清末の上海開港に至るまで長江流域と潮汕地域を連結する上での最も重要な商道となり、汀州、武平、峰市、大埔が重要な商道の結節点に位置することによって、トランジット貿易は地域経済の要となった。また、資源状況から見れば、この地域では、森林、鉱山資源は富むが、耕地は延べ面積の10%にも及ばず、さらにそのほとんどが土質から食糧作物より、むしろ経済作物にふさわしいものであった。こうした食糧資源の乏しさと自然資源の豊富さを共有することや上述の地理的位置、交通状況によって、汀江流域の人々は生存の道を他地域との商品交易に求め、この商品交易を成功させたことによって山地経済から海洋経済への転換を実現した。このように山と海が連結した地理的環境の中に生まれた汀江流域の地域文化＝客家文化は、とうてい閉鎖的環境の産物ではなく、また単なる山地文化とも異なり、山文化と海文化との融合によって生み出されたものと言えよう。

(3)第三章「汀江流域の地域文化と農耕(民)型文化」においては、唐宋以来汀江流域の産業構造と住民の生業形態を検討した。同地域では古来、食糧生産中心の農耕業で自給自足的経済を維持するには無理がある一方、鉱業、林業、手工業、流通業などは、地域社会の経済基盤を築き、ほとんどの住民の生活を支える役割を果たしていた。時期的に言えば、次の通りである。宋代において、農耕業では焼畑方式が広く残存する一方、鉱業では繁栄を極めた。明代から清代にかけて、食糧は主に他地域に頼っていたが、林木、土紙、煙草、藍などに関連する栽培業、手工業、流通業はほとんどの住民の生活を支えていた。また地域差からすれば、寧化を中心とする北部においては食糧生産中心の農耕業の比率は比較的に高く、南部各県においては手工業と流通業の比率が高く、農耕業が副業的存在であった。南端にある大埔では市場が住民の衣食の源となったほど流通業が最も発達した。こうした産業構造と生業形態の特徴から、同地域文化＝客家文化は性格上、農耕(民)型文化とは異なるものであると言えよう。

(4) 第四章「汀江流域の固有文化とその変容過程の特徴」においては、汀江流域の固有文化とその変容過程の特徴を検討した。

まず新石器時代のものと同判明される出土文物や原始図像文字、南海王国の存在は、かつて汀江流域には中原文化と別系統で、いわば古越文化の一種が存在したことを示している。また州、県の設置が相対的に遅れた福建において、汀州の設置が一番遅かった。そのために汀州が設置された以前、この地域には租税労役から逃げ出した者や政府軍に敗れた「?蛮」などの反朝廷の人々が大勢集まった。汀州設置の直接的起因は「三千戸余り」の逃戸が検括されたことにある。さらに同地域の地理的環境や民俗現象などからも、先住民でも外来移民でも一つのエスニック・グループではなかったことが示されている。つまり、汀州が設置された当初とその後の相当長い時期において、当地域の住民は複数のエスニック・グループに分かれていたと考えられる。

それゆえ、汀州が設置された以後、中華文化秩序の導入による汀江流域固有文化の変容過程は、相異なる文化を持つ複数のエスニック・グループが和戦両様を通してそれぞれ自らの固有文化の変容につれて同一化され、一つの地域文化集団として統合される過程であり、同地域文化の生成過程でもあった。この固有文化の変容過程＝諸エスニック・グループの文化的同一化と漢化の過程＝地域文化の生成過程には、大きな転換点が二つあった。一つは宋代末ごろ地域共通語＝汀州話が形成されたことであり、これは諸エスニック・グループがおおむね一つの客家共同体と統合されたことを意味した。もう一つは明代中葉ごろ南部地区出身の科挙合格者の多く現れたことや、定住型生活様式の定着などの現象が現われたことであり、これは同地域文化が漢化されたことを示している。この転換は決して単なる外来漢族移民が非漢族の住民を同化させた結果ではなく、複数の要素の複合作用によるものであった。就中、科挙と宋代の鉱業が果たした役割がとくに注目に値する。

(5) 第五章「汀江流域における諸エスニック・グループの文化的同一化と漢化(一)」においては、科挙を視点に、汀江流域における諸エスニック・グループが文化的に同一化し、漢化して一つの地域文化集団として統合された過程を考察した。

まず地方志など文献史料に基づいて唐宋元明時期における汀江流域の科挙状況の歴史的变化を考察した。史上において汀江流域の科挙活動は次のように進展されてきた。(a) 宋代に入ってから、科挙合格者が多く現われるようになった。汀州設置の唐開元二十四年(736)から宋太平興国三年(978)までの250年に近くの間にはただ進士2人であったが、靖康元年(1126)までの148年間に進士28人と特奏名進士1人、南宋開慶二年(1260)までの134年間に進士36人と特奏名進士106人は汀江流域から送り出された。宋代は汀江流域史上、進士を最も多く送り出した時期であった。しかし、これらの科挙合格者は州庁所在地の長汀県以外に、ほとんど北部の寧化一帯に集中していた。汀江流域において、寧化は一番早く設置された県であり、さらに食糧生産中心の農耕業が早く定着したところでもあった。(b) 明洪武十八年(1385)から崇禎十六年(1643)まで、汀江流域は進士58人、挙人296人、貢生1631人、武進士5人、武挙人7人を送り出したが、南部諸県出身の科挙合格者の数は北部のそれを超えた。その中で寧化県と上杭県は対照的であった。宋代、上杭出身の科挙合格者は一人もいなかったに対して、寧化は進士30人と特奏名進士41

人を以て汀州の一位についた。しかし、明代になって、上杭(成化十四年に上杭から分割した永定を含む)は進士と挙人を併せて94人出し、その数は寧化、清流、帰化三県の総数より7人も多かった。この背景には、鉱業中心から林木、土紙、煙草に関係する栽培業、手工業と流通業が中心となったという産業構造上の変化とそれに伴う定住型生活様式の定着があった。さらに微視的に見れば、海洋経済に参入する便利さを持つ地区であればあるほど、送り出した科挙合格者が多かった。化外地であった汀江流域において、科挙活動の進展は住民の文化的同一化と漢化の度合のあらわれでもあれば、その同一化と漢化を促がす要素でもあった。

こうした科挙活動の、唐宋から明代にかけて北部から南部への進展に伴って、汀江流域、特に南部地区には次のような社会的現象が現われた。すなわち(a)宗族の形成と統合、(b)宗族関係を超えるコミュニティの形成、(c)全住民の共同先祖の觀念の成立、ということであった。これらの現象は異なる次元から、同地域における非漢族だったエスニック・グループが漢化してきたこと、諸エスニック・グループが漢化に基づいて同一化してきたことを示している。本論文では、猪西廖氏宗族と白砂コミュニティを事例に具体的考察し、また「寧化石壁伝承」という「祖先の絞り込みによる連帯意識の生成を」客家「『民系』のレベルで可能にする伝承」(1)の成立背景を、「先祖は寧化(石壁)を経て福建に入った」伝説と「先祖は寧化(石壁)からやって来た」伝説に分け、別々に検討した。まず、宋代における福建の文人の中で族譜の編纂がはやっており、同時期福建人がみな光州固始を先祖の故郷としていたことから、「先祖は寧化(石壁)を経て福建に入った」という伝説は宋代寧化一帯の科挙合格者を中心とする文人がつくったものであると考えられる。そして、「先祖は寧化(石壁)からやって来た」伝説が汀江流域南部に伝わっていることと、粵東粵北の客家人には先祖は寧化(石壁)から福建に入って、後に汀江流域南部のどこかをを経て南下してきたという伝説が伝わっていることから、「先祖は寧化(石壁)からやって来た」伝説は汀江流域南部でつくられたのであると推測される。さらに唐宋時期における寧化と汀江流域南部地区との格差、明代以降南部地区における科挙活動の進展、家系を明確する必要性と科挙との関連などから、「先祖は寧化(石壁)からやって来た」という伝説の成立背景には、明代汀江流域南部、特に上杭一帯における科挙合格を目指す者と科挙合格者を中心とする文人が、宋代寧化文人による族譜を手本にして、同姓の寧化人の家系を自らの族譜に移植したということがあったと考えられる。「寧化(石壁)伝説」の成立は化外の地であった辺境にある人々が自らのアイデンティティを中原漢族に置き、それを以って中華世界における自己の存在の正統性を主張しようとすることを意味するものであると見てよからう。

藍、雷、鍾は邊族の代表的姓氏とされている。汀江流域におけるこの三姓氏の住民の多くは1980年代、民族的帰属上で漢族から邊恒に変更した。本論文では同地域におけるこの三氏姓の科挙状況の歴史的变化とそれに関連する地域社会での地位を氏姓別に考察した。結局、この三姓氏の住民が他の姓氏の住民とともに文化的同一化と漢化の道を歩んできたことは明らかになった。

一方、周囲地域に比べて、汀江流域における科挙活動の展開は立ち遅れ、当地域出身の科挙合格者の人数は相対的に少なかった。これは、当該地域文化の生成過程の特徴の一つとも言えよう。

(6)第六章「汀江流域における諸エスニック・グループの文化的同一化と漢化(二)」においては、客家語と鉦業とのつながりに対する考察を中心に、汀江流域における諸エスニック・グループの文化的同一化と漢化の過程を考察した。

最近の客家語に対する言語学的研究によって、音韻上で唐宋時期の中原漢話に近いが、語彙上でミャオ・ャオ語とチワン・トン語に近いという客家語の共通的特徴が明らかになった。また漢語の金属名詞の源が主にトン・タイ語につながることも実証された。この二つの研究成果を併せて考えれば、そこから、第一に客家話と鉦業とのつながりと、第二に客家の起源にはかつて汀江流域に住んでいた「畝人」を含む複数の非漢族のエスニック・グループが含まれていた、というように推測される。

客家語は唐末から宋代にかけて形成してきたとされ、また汀江流域の共通話である汀州話は、早期客家語の代表とされている。本論文ではまずこの汀州話は如何にして形成されてきたのかを考察した。宋代において、農業、鉦業、流通業が汀州の主な産業部門であったが、三者のうち、鉦業は中心的な存在であった。官営、半官営企業を主とする同時期の汀州の鉦業は、生産、流通などを通して地域共通語の形成を促がした。客家語と呼ばれる汀州話の成立は、同地域における諸エスニック・グループがおおむね一つの「客家」という共同体として統合されたことを意味する一方、彼らが鉦業活動の参加によって他の山地人から区別されるようになったことを示している。さらに客家語と鉦業とのつながりへの理解を深めるために、本論文では客家語地区の鉦業史を調べ、客家語地区と中国史上、とくに唐宋時期の主要な鉦山との分布の一致を明らかにした。

終章では、本論の諸章の論点を確認した上、汀江流域の地域文化とその生成過程への理解を深めるために、同地域文化の主体集団の名称、すなわち「客家」の原意と意義の変化を検討した。「客家」という称呼を持つ集団は、実は三つもある。この三者の関係は、「客家」(HAK-KA)の名称が「SAN HAK」に由来することを示唆している。客家(HAK-KA)と「SAN HAK」との関係は、以下のように変化してきた。まず唐宋時期、官営、半官営の鉦業によって客家(HAK-KA)＝「SAN HAK」は普通の山地人から区別された。また明代以降、汀江流域、梅江流域における山地経済と海洋経済との結合、山文化と海文化との融合によって客家は「SAN HAK」から離脱しつつあった。さらに清代中葉以降、「客家蛮夷論」への反発としてこの両流域出身の知識人は、客家話が粵語、猪語と比べてより北方方言に相似することを根拠に、客家は中原土族の末裔であるという「客家論」をつくり出したが、それによって客家は「SAN HAK」に対立するものとなった。最後に1950年代に行なわれた中国政府による民族識別によって、客家は漢族であり、「SAN HAK」は「邊族」であることが公式に確立されるに至った。要するに、客家とその文化は汀江流域と梅江流域の独特の地理的環境と社会経済史的背景のもとに生成してきたものである。